慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	家永三郎著『太平洋戦争』
Sub Title	S. Ienaga, The Japanese war in the Pacific
Author	内山, 正熊(Uchiyama, Masakuma)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1969
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.6 (1969. 6) ,p.117- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19690615-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

家永三郎著『太平洋戦争』

＊

本書が文字通りユニークな太平洋戦争史論であることについては、一たびこれを繙いた人の誰しも異論のないところであろう。日本思想史の学者としてわが国で第一列に位する著者が、敢て自らの専攻領域以外の分野に斧鉞を入れ、大胆な問題の絞り方をして、いわゆる太平洋戦争に完膚なきまでのきびしい告発断罪を下した本書を公刊したことは、昭和元禄といわれるような今日であるだけに特に意義深い。それは、太平洋戦争を、東洋の西洋に対する反抗奮起の戦としてとらえる林房雄著「大東亜戦争肯定論」とは対蹠的なアプローチを試みている点からも特徴的であり、かかる戦争讃美肯定傾向ないし戦記物ブームに対して一大痛棒を加えた意味でも異色の書である。

このような太平洋戦争史論の出現は、現代青年層が戦争を追体験する可能性を希薄化されている状況においては、とりわけ重要性をもつ。この本の存在理由は色々の意味できわ立つている。それは、「太平洋戦争の赤裸々な真相を科学的に再認識しかつその成果をできるだけ多数の人々の共同財産たらしめ、ふたたび悲劇の到来を防止するために役立たしめること」（結論二七八頁）を意図した著者が、全巻を通じて「過去の日本国家の犯してきた罪悪と過誤とに対し、終始忌憚のない真実糾明と批判の態度を貫いてきた」（あとがき三四六頁）ことにも見られるように、これは単なる歴史書ではなく、警世の書である。いわば本書は、日本帝国主義の犯した太平洋戦争の残忍な爪跡を痛くえぐり出した戦争弾劾の書であつて、その鋒先は恰かも不倶戴天の敵にでも遭つたように鋭く軍と国家権力とに向けられ、その旧悪を暴露することによつて、今や忘却の彼方に葬り去られんとしている戦争責任の所在を究明しているのである。それは、ただ単に太平洋戦争を対象とするだけでなく、この戦争を招来した禍根を探求して、遠く明治以来の日本帝国華かなりし頃からの中国朝鮮の人々に対する蔑視迫害を糾弾してやまず、この点に関する反省を欠いた大東亜戦争肯定論を無責任なものとして断然斥けるのである。このような端的な戦争責任追求の態度は、右翼ないし保守反動の立場から、はげしい非難を受けるであろうが、それを「覚悟」の上で、本書を出版された著者の信念に対して我々は思想的立場の如何を問わず、感動せざるをえないであろう。とりわけ昨年の

明治百年に際して、日本の過去を深く反省するよりも、むしろ懐旧美化するという風潮が強くあつたのを顧みるとき、戦争の実体を再確認させる意味でも本書の社会的意義は大といわねばならない。

これと関連して本書のもつ意義には、歴史学者としての著者の基本姿勢に対する問題がある。いうまでもなく、日本古代思想史研究の第一人者である著者が、歴史家としては取扱い難い現代史の領域に足をふみ入れ、独自の視角から史料をとり入れて、大胆不敵な戦争反対論を展開したことは、その歴史解釈の方法論について批判を受けざるをえないであろう。本書はたしかに従来の戦争史書とは類を異にしている。単なる戦史でもなく、政治史でもなく、同じテーマをとりあげた他の書物に較べて、反軍反戦の立場が余りにも強烈であるのみならず、著者特有の心情的アッピールが余りにも高圧的であることは、本書を歴史書としてでなく、イデオロギー的な臭気紛々たる傾向の書物として評定されるおそれなしとしない。本書を読む人は、称賛側と批難側とに二分されると思われる。本書はそれほどまでに特異な性格をもつているのである。

しかし家永教授が、かかる思想的偏向を感知させる本書を出すに至つたことをあげつらうよりも、かかる書物を敢て執筆せしめるに至つた時代的背景を我々は問題とすべきである。すなわち、著者は、「太平洋戦争当時の実践的評価が今日からふり返つて正しいかどうかを反省することをしないで現代の世界にまじめに生きていけるわけはないと思」（序iv）い立つたが故に、本来は専攻でないのに拘らず、敢然と太平洋戦争という政治史、国際関係史的な課題に取組んだのである。それは、戦争の惨禍を身にしみて体験して来た歴史家の一人として、「この戦争に改めて科学的な光をあてて見直してみたいという執念」（あとがき三四三頁）から、従来とは異つた探求角度から文献資料の収集に当り、いわば、草の根レベルで戦争をとらえ、その実態を伝えようとしたものである。

著者は、戦争における残虐性、人間性の破壊を豊富な資料を駆使して明らかにしているが、我々はこのきびしい事実を勇気をもつて見つめなければならない。今日のような状況においてこそ、我々戦争の惨禍の中から本質を探求する必要があるのである。とりわけ戦後二十数年を経て、戦争体験を全くもたない世代の比率が増加し、日本人の戦争に対する考え方が変りつつある今日、この戦争の惨禍の追体験ということは一層重要である。この追体験を通じてのみ、我々は高価な犠牲を払つて得た平和の貴さを理解することが出来るのではないであろうか。今日の戦争を経験しなかつた若い世代は、戦争を観念的にしかとらえることが出来ないのであるから、この戦争の悲惨を余すところなく語つている本書は、彼等にショッキングであるにちがいない。特に心情的に訴えることの大きい本書は、太平洋戦争の重要な側面である政治外交的検討において欠けるところがあるにせよ、戦争の悲惨さを描き出すことにおいて成功していると いつて差支えない。

いいかえるならば、著者は戦争の惨禍を強く印象づけることによつて、反戦思想をもり上らせ、戦前に見られた非民主的な政治体制の復活に対する警鐘を乱打しているのである。かつて戦時下に忍苦

の生活を強いられた市民の声を伝えることによつて、今日では到底想像もつかない国家統制、いまの言葉でいえば体制の強権的支配の実態を我々に実感させ、市民的自由の重要性を身近かに感じさせるのである。それはまた、著者の戦争に対するきびしい反省と平和に対する熱情に溢れて、平和の象徴である憲法を堅持すべきことを痛感させずにはおかないであろう。

＊

のみならず本書の大きな特色と思われるのは、従来の太平洋戦争史が政治的、軍事的側面に重きをおき、いわば支配者、権力者の体制的見地で書かれたものが多かつたのに対して、本書ではかかる人民不在の視座をすてて、下の方から戦争に照明をあてていることである。これは、その参照した文献資料のとりあげ方からも分ることであるが、従来は国家機関の記録、特に軍部の高級統帥関係のものを収集するのがつねであつたのに対して、著者は戦争の生きた姿をとらえるために、「末端の第一線で苛烈な戦闘に身をさらした従軍兵士の体験記録」を進んでとりあげ、その史料価値を認めているのは注目に値する。すなわち、将軍や将校の手に成る公私の文書類よりも、戦場の極限状況の記録として兵卒の手を通したものに注目し、フィクションを交えていても文芸作品を大いに活用していることは重要である。このような題材は戦争の反人間的な面、戦争の悲惨を浮彫りにするのに十分な効果をあげているが、さらにまた戦場をはなれた戦時下の一般人民の体験記を豊富に収録していることは、戦争の実体を知らせる上に有効である。

さらに戦争は何故阻止されなかつたのか、いかにそれが無暴非道な戦争であつたかという基本的な問いに対しても、大衆人民のなかから答えていることは、戦後の歴史主体を新しくとらえたものとして高く評価さるべきであろう。著者は流石に歴史学者としての眼識鋭く、今まで日の目を見るに至つていなかつた文献資料をつかみ出して、これから新しい戦争史を構成しているが、それは単に新資料の発掘というメリットだけでなく、戦前日本では蹂躙されていた人権がいまや戦後漸く頭をもたげて来た市民社会の反映として、いわば人民大衆の力を改めて自覚させるという実効をもつているのである。

しかしながら、本書が戦争の悲惨非道さを描き出すのに成功した反面、それが心情的、文学的要素をとり入れすぎて、歴史書というよりも文学書に近いという感を与えているのは否めない。それはエモーショナルにすぎ、端的にいえば被害者意識過剰な説述が少くない点も、本書に対する抵抗を強くさせると思うが、それよりも重大なのは、この戦争に改めて科学的な光をあてて見直そうという歴史家としての著者が、その史観ないしアプローチにおいて非歴史家的であるという批判を受けなければならないことであろう。

いうまでもなく、本書の重要な特色は、同じ太平洋戦争をとり扱つていても、そのとり組み方が文化史的、生活史的であるということである。それは著者独壇場の資料活用を通じて、今迄とはちがつた戦争の見方を改めて提示し、平和をむさぼり楽しんでいる今日の

我々に戦争の悲惨さを今更ながら痛感させながら、しかも我々が物足りなく思うのは、太平洋戦争の本質解明という点では、片面的接近しかしていないのではないかということである。

＊

第一に、それは著者の歴史の解釈の仕方についてである。著者が「太平洋戦争」を柳条溝事件から降伏までの「十五年戦争」として、これを一連不可分的に捉えているのであるが、もしこのとらえ方をするならば、それは明治まで遡つて、日清戦争ないしは日露戦争に起点をおくべきではないかと思われる。歴史というものは、決して断絶したものではないから、ある事柄の起源を探ろうとすれば、次次に遡つて行かざるをえない。つまり、太平洋戦争についていえば、太平洋戦争は日中戦争と深いつながりをもち、それはまた中国に対する明治以来の伝統的な侮蔑優越意識に根ざした武力侵略がもとであるということになるであろう。この見方を貫くと、太平洋戦争の原点は日本の帝国主義的進出が軌道に乗つた日露戦争後、中国をめぐつて日米対立が顕在化したところに求めらるべきである。ここに書評の域をこえるかも知れないけれども、著者の十五年戦争という論定に対して、私は私なりに家永説を生かしつつ、その原因遡及を試みれば、それよりさらに十五年以前まで行きつかざるをえないのである。

まずそれは太平洋戦争と銘打つ以上、太平洋をめぐつて日米関係の対立を来たした最初の原因まで探求しなければならないと思うが、この最初の契機をどこに求めるかは問題があろう。例えば日米係争の初因を、米国のフィリッピン領有によつて太平洋を横切る米国の東洋進出ラインが画定されたこと、また日露戦争まで日本を支持育成していた米国が、日本の戦勝に伴う強国化を警戒して、一九〇八年日本に対する示威デモンストレーションであるアメリカ艦隊の大西洋から太平洋への回航日本訪問を試みたのを日本は大歓迎したけれども、実はそれは米国が日本を仮想敵国とした最初の企画であつたことなどもあげられよう。しかしそこに日米対立の最初の確執のきざしがあるにしても、それが日米戦争の根源であるとはいえない。むしろここで注意すべきことは、日米競争の昂進は中国市場をめぐつてであり、日米関係悪化は中国を抜きにしては考えられないことである。悲劇的なことは、中国を介しての日米相反関係の存在であつて、米国と中国が親善友好関係にあることは、つねに日本との関係を不和にし悪化させたのであり、逆に米中関係の悪化は日米関係の好転を招くという相反関係が問題なのである。この意味において、日露戦争で日本に対する好意的中立をとつた米国が、対露戦勝以後日本の中国進出の顕著になるにつれ、強硬な反対を表明し日本牽制を強め、対中干渉を阻止したことが遂に日米戦争を招くに至つたといつて差支えないであろう。

この日米対立が最初に表面に露出したのは第一次大戦のときの日本の山東侵略であつて、この山東問題における米国の徹底的な中国支持と強烈な日本抑圧こそ、日米関係の敵対憎悪の根源をなすものである。さらに一九二一年のワシントン会議で、日本はこの山東問

題の故に非難の的となり、山東半島の還付を余儀なくされたのみならず、海軍々縮条約によつて日本海軍に対する制約を強め、その反動をかもし出すと共に、従来日本外交政策の中枢をなしていた日英同盟を廃棄させるという強圧を加えたのは米国であつたが、これが以後の日本の進路に大きな影響を与えたことはいうまでもない。当時日本が中国の主権を無視して傍若無人の非道外交を行い、二一ヵ条要求をつきつけたことが米国の強い反感を買つた点は我々が率直にその非を認むべきであるにせよ、モンロー主義を国是とした米国が日本の対中侵略に対しては強硬な干渉的態度をとり、外交的圧迫非難に終始したことが、日本の反米気運、過激な軍国主義、右翼勢力の抬頭を促したのである。太平洋戦争の原因といつたときも、それは日米関係を第一義的にとりあげなければならないであろうが、その対立衝突の根元を探り求めるならば、第一次世界大戦の山東問題、ないしその結末たるワシントン会議に遡らざるをえないと思われる。したがつて、家永式遡及方法に従えば、それは十五年戦争でなく三十年戦争ともいわれなければならなくなるであろう。

＊

しかしながら、太平洋戦争をこのような形で連鎖的に捉えることには理由なしとしないが、それがどうして日米開戦に始まるのかという点になると、やはり日中戦争との繋りよりも、日米関係そのものに焦点をしぼるのが適当であるかと思われる。いわば日米戦争のもつ個性に着目して、本目細くその因果関係を把握する方がよいのではなかろうか。つまり、太平洋戦争が日中戦争と深い因果関係をもつという意味では連続性を有するが、「日米関係」という全く新しい契機からみるならば、そこには異質な様相が現れるのであつて、これがいわば太平洋戦争の個性ともいうべきもので、ここに一段落の区切りをおいて然るべきであると思うのである。それによつて、複雑な歴史事象を単純化することなく、その本質に接近出来るのではないであろうか。本書にはこの点の考慮が欠落している。その結果、明治維新から終戦までの約四分の三世紀の歴史には、種々の起伏があつたのにも拘らず、それはすべて捨象されてしまい、恰かも「太平洋戦争」に向けてただひたすら走り続けてきたかのような観を呈してしまうのである。

しかしその戦争の背景となつている国際情勢を顧みるならば、満州事変、日中戦争、太平洋戦争の開始時機を比較してみて、英米、中ソ、独伊などの態度は著しく変化して居り、それらが複雑に絡み合つて因となり果となつているのであるから、この点からすれば、太平洋戦争と日中戦争とを同一次元で結びつけることは失当であろう。むしろ、日中戦争は伏線ないしサイドラインにおかれるときはじめて真に生きて来るのであつて、太平洋戦争は太平洋という地域的表現にとらわれるわけではないけれども、中国を向いているのでは足りず、米国ないし世界を向いて見られるべきであつて、それは第一次世界大戦の一環としてとらえるべきであろう。この点の解明が足りないので、十五年戦争という問題提起も、平坦な直線コース的独走という観を与えるのである。著者得意の国民生活の叙述にお

いても、太平洋戦争以前のそれは一律に暗黒時代として描かれているのも問題あるところである。著者がおしなべて十全的に感情的なまで反軍的、反国家的な歴史観で、過去のわが国の歩みを罪悪にみちたものとする所論には、余りにも偏向した観念論に陥つたものとして、それに対する反撥が起るのも当然といえよう。

著者は歴史家らしく、克明に実証的資料をあげているに拘らず、逆説的にも非歴史家的な史論を展開している点は注意すべきことである。著者の立場は、戦前歴史の全面否定の上に立ち、明治以後の歴史をおしなべて今日的尺度でとらえ、新しい角度から解明して行くやり方は一般の批判を受けずにはおかないであろう。すなわち、著者の歴史事象に対する価値判断が余りにも明瞭であつて、戦争は悪であるという基準から律せられるために、その当時おかれていた状況の中で解釈するという余地を欠き、むしろ著者の抱く理想型で割り切つてしまうことに対する反対は意外に強いのである。その一例として、日本軍の旧悪を強調するのあまり、それとは反対に中国軍の行動を美化賞讃するという弊に陥つていることがあげられよう。侵略されて祖国防衛のために戦つている中国共産軍が、日本軍に較べて大義名分が立ち、軍紀も厳正ではあつたのは事実であろうけれども、彼等もまた日本軍と同じく極限状況にあつた以上、「農民からたとえ針一本、糸一すじといえどもとつてはならぬ」云々といつた「訓令がほとんど文字通り実行されていた」（一一八頁）という如き説述は却て反撥を買うことになりはしまいか。いわば、僅少な事例を一般化したり、過大評価するという傾きが出て来て、それが家永的独断という印象を与えるのである。それは、最近の逆行現象に対する著者の思想的潔癖から出た抗議であるとして好意的に理解すべきであろうが、それにも拘らず個別的事実認識にこだわりすぎて、重要な事実の背後にある意味を探ることがなおざりになつていることを指摘しなければならない。軍国主義には反対で平和主義の点では家永教授と同じ立場に立つ私ではあるが、「阿南陸相が反乱の予備陰謀に参加した罪、あるいは反乱防止の義務を故意に尽さなかつた不作為の罪（不真正不作為犯）を犯した責任を免れない。十五年戦争が柳条溝の犯罪から始り、陸軍大臣をふくむ降伏時の犯罪に終つたところに、この戦争の本質がよく露呈している」（二六四―二六五頁）という論定には賛成出来ない。このように陸軍を中心とする軍人にあげて戦争の責任を転嫁してしまうことは、頗る割り切つた単純議論である。阿南陸相を不作為犯の故に断罪されているけれども、たしかに不作為そのものは許さるべきではないにせよ、その状況下でなぜ陸相があのような行動をとらざるをえなかつたのであろうかということを考え、あの一見単純にすぎる行動の故にこそ、陸軍も一本にまとまつて終戦に向つたという解釈もまた成立つ。それを犯罪の形で一方的に断ずることは問題であろう。

最後に率直な感想を述べるならば、本書の幾多の優れた立論、史料発掘に拘らず、本書全般を通じて、稍もすれば感情にけおされたかに見える反軍国主義的論調は逆効果を出したのではないかと思われる。根本において大筋において著者の考えに賛成する人でも、感情的な抵抗を個々の論述については感ずるのではなかろうか。

しかし、著者にしてみれば、このような心情的アッピールによつてのみ戦争の本質を探知することができるのだといわれるかも知れない。それは、共同研究「太平洋戦争への道」のような一見客観的な戦争研究が却つて戦争に対する本質的反省を阻害するということを憂えた著者の考えから、なかんずく大東亜戦争の名称復活に見られるような逆コースに対する抗議から、痛烈な批判を展開したのであると思われる。たしかに、本書の中には、他の類書に見られないかくれた新資料がとり上げられて、著者特有の視角から建設的にまとめあげられていることを誰しも認めなければならない。それは左がかつているという批判があつても、それはそれなりの存在理由をもつているのである。この意味において、我々は林房雄著「大東亜戦争肯定論」を読むのと同じ姿勢で、この「太平洋戦争」を読むべきである。この本の長短何れをも素直に認めた上で、その毀誉褒貶の故に、日本人の書いた太平洋戦争史書の中で最もユニークな価値を本書に見出すのはわれわれのみではないであろう。

追記　この書評は、大学院法学研究科修士課程（政治学専攻）における昨年度国際政治論特殊講義のテーマ太平洋戦争原因論のテキストとして、本書を使用したので、その間一年にわたつて、大学院学生の諸君と討論した結果を整理したものである。毎週水曜午後本書の一章ずつ、当つたレポーターの報告を中心にして、検討を重ねたが、しかしそこでは家永理論に追随盲従する者は殆んどなく、率直に批判的姿勢で本書を縦横に解剖した者が多かつた。概して家永教授独特の高音的な論調に対しては、本書を高く買つている者でも抵抗を感ずること少からず、ときに揚げ足とりに傾いたこともあつた位、忌憚ない批判が展開されたものであつた。しかし、それだけに本書に対しては多くの疑問、問題提起がなされたので、その報告や感想を放置してしまうのは惜しいと思つた私は、書評の形で整えておくことにして、ここにまとめあげてみた次第である。しかし、それを構成するのに、各人の意見を出来るだけとり入れ、私自身の考えはおりこまないように努めたけれども、やはり私の主観も入つてしまい、綜合的に集成したものとしては不十分なものになつてしまつた。それにも拘らず、昨年の講義に出て討論に参加した、秋山和宏、藤田弘道、木谷勝、松井洋一、中村孝英、佐藤秀三、佐野茂孝、坂中英徳、鈴木恒男、山口三男の諸君は、真摯に独自の見解を述べて、講読を精彩あらしめ、研究を実りあるものにしてくれた。この書評はその結実にほかならないことを附記して、上述の諸君の労を多としたいと思う。（一九六九・四・一〇）（岩波書店、一九六八年、三四八頁、五〇〇円）

（内山　正熊）